第５回地域福祉センターに関する検討委員会

日時：令和5年3月27日（月）

15時30分から17時00分

場所：神戸市役所１号館14階　1141会議室

１．開会

２．出席者紹介　（資料１）

３．議事

地域福祉センターに関する検討委員会　最終報告書（案）について　（資料２）

○事務局より資料の説明

○委員長発言

ここに至るまでに原案を事務局とともにつくりました。どういう流れでこういった最終報告に至ったかという経緯、中間報告で出した内容をもう一度おさらいし、かつ、それを受けてふれあいのまちづくり協議会（以下、「ふれまち協」という）の皆さんにフィードバックして、皆さんからまた新たな御意見を賜り、あるいは我々の考えに対する御賛同、あるいは質問、あるいは反対意見等を伺ったことを記しました。最終的には、地域福祉センター（以下、「センター」という）は持続しましょうという我々のスタンスの中で、じゃあ持続可能な具体的な提案は何かということで提案事項を設けました。とりわけ施設管理に共通の運営基準を設けるという言い方で、今までは共通のルールという言い方をしていたのですが、ルールと言うと、何か行政から押しつけられているような感じを受けるという御意見もあり、ルールに対する誤解があったらいけませんので、要するに共通の運営基準を設けた上で、館ごとの裁量の余地も残すべしということで考えました。あと、思い切って利用料金制ということで委員会の皆さんの御意見を反映して、きちんと財政的な裏づけ、そして、これによってまた自主財源ができて、人を雇うなり、現在抱えている様々な課題を克服する一つの糸口になるかなという思いがあります。

それから、提案ではあくまでも理論上の四つのパターンが想定されるわけで、じゃあ各センターがどれかを選ぶという制度にするのか、あるいはもう一つにまとめて、一つのやり方でいきますということにするのか、この辺りはこれから市が協議する、あるいはまた関係者と一緒に話し合っていただく一つのきっかけになるような、こういう選択がありますよ、じゃあどうしますかと、四つの選択制を導入するか否かも含めて、また市民にも、神戸市にも考えていただいたらいいかなというスタンスで提案しております。

そういうことで、最終的なこの委員会からの提案を五つにまとめて、報告書の原案ができました。それをまた各委員にお諮りして、皆さんからこういう趣旨をもっと入れたらどうかということを幾つかお聞きしました。例えば４ページの下のほう、センターの将来像を地域活動の促進、地域社会の課題解決に寄与する施設と掲げたいと。さらに多くの地域住民がセンターを利用するとともに、地域活動に参画し、公共の感覚を持った市民が育つ場となることを願うという、そういった市民の自治をきちんとこういう場で発揮するということを、もっと出したほうがいいのではないかという御指摘がありました。これは、やはり市民自治の一つの拠点だということを改めてうたったほうがいいという御趣旨だと理解しましたので、そんな文言を入れました。

それから、やはりもっと地産地消、あるいはコミュニティにおけるビジネス的な性格をという御指摘も受けまして、７ページの三つ目の段落、ソーシャルビジネス、コミュニティビジネスといったスモールビジネスを実施することも可能となるということで、今までのもっと動的な、とりわけ財をつくり、またその財が動くということも含めた活動的なものをこういう場で考えることが必要ではないかという御指摘があったように聞いていますので、その御趣旨をこんな形で入れました。

それから、この四つのパターンで、９ページの（４）の「両方の活動を行わない場合」ということが望ましいのではないかという意見もありましたが、ここでは理論上四つのパターンが想定されるということで、将来的に実際こういうこともあり得るだ

ろうということはやはり想定しておくべきだろうと。ただし、ではそれでほったらかしにするのではなくて、次の10ページの提案３でありますように、ふれまち協への伴走支援を行うということで、決して見捨てるわけではない、見捨ててはいけないということをおっしゃっていましたので、委員のそういった趣旨をこういう形で生かしたものです。

それから、何でもこのセンターでできるというよりも、そのセンターが特定の機能に特化して、この機能は得意とか、これをやりましょうというパターンがあってもいいのではないかという委員からの御指摘がありました。これは10ページの二つ目のパラグラフに、そういう形で地域の判断により、例えば何々機能、何々機能という特定の機能を強化することも選択肢の一つであるという文言で、委員の御意見を反映したわけです。

皆さんの御趣旨を最大限生かす形で、かつこの委員会としての最大公約数的なものを入れたつもりですが、まだまだこれが足らない、あるいはこの文言は少し自分の趣旨とは違うように理解されているということがあれば、御意見賜りたいと思います。

○委員発言

４ページは、公共の感覚という言い方でいいかどうか。自治意識ですかね、言い方としては。

○委員発言

難しいですね、自治意識はいいですね。

○委員発言

シチズンシップ教育とかいう話になるとややこしいので、自治意識のほうがいいかもしれません。自治意識を持った市民が育つ場となることを願うという。

それから文言をどうこうという話ではないのですが、少し運用上のところで気になった部分があります。昨年度も「地域活動の場づくりにおけるワーキンググループ」という検討委員会に参加しており、その最終報告書でもやはり同じようなことを言っ

ているのですが、そこを受けて、もう少し膨らませていただきたかったというところが実は数点ございます。

例えば11ページの提案の５、これはセンターに関する検討なのでこれでいいかと思うのですが、昨年度の委員会はもう少し幅広に行いましたので、市の持っている施設以外に、空き家や空き地等、そういう民間のものをちゃんとうまく使うみたいなことも、視察に行ったり、実際にやってらっしゃる方にヒアリングに来てもらったりしていたので、それが入らなかったのは若干残念です。

○委員長発言

少し本文に入ってはいます。

○委員発言

民間のところも入っていますか、空き地・空き家の活用とか。ああ、「多数存在する」ですね。

それから一番気になっているのが、提案３のコーディネート機能です。ずっとこの手のワークショップ、コーディネート機能が大事だという言い方をしていたのですが、昨年の委員会では、じゃあつなぎ方とかつなぐ人材に関して、もう少し丁寧にきちんと研究してほしいといった話がありました。というのは、全般的にボランティアをやっていらっしゃる方には、本当に頭が下がるのですが、今の自分たちのやり方が人手不足になってきたので、同じことを継承してくれる人材、それをボランティアとして欲しいということをおっしゃいます。前の報告書にも、やはりそれだけでは駄目で、特定の役員さんに集中しがちなものを、ＩＣＴを加えて分散させていくとか、足らずを埋めるだけではなくてやり方を変える。つきましては、そのふれまち協側とか受入れ側の受援力を開拓しながら進めるとか、何か巻き込んでしまう、新しい方を巻き込むのはいいけれども、一つプロジェクトが終わったら終わりにしないで、ちゃんと巻き込んだ責任やフォローアップとか、その辺もちゃんとつなぐというところをやっていかなければいけないというので、答えは出なかったんですが、少なくともつなぐ人

材に関して研究会やノウハウ等を官民の知恵を集めてつくっていかないと、なかなかさらっとオンラインシステムをつくったとか、コーディネーター機能を優先するだけではいかないなという話を去年もしたので、書きぶりとしてはこれでいいかと思うのですが、ぜひ来年の施策ではちゃんとつなぐ。つなぐは足らずを埋めるじゃなくて、仕組みを変える、受援力も開拓していくというところを、ぜひ行政の方に見ていただきたいところです。

○委員長発言

来年度から神戸市が組織機構の改革をされるということですが、組織の機構を改革するだけではなくて、実際の働き方やその機能の仕方の部分の御指摘かと思います。

○事務局発言

今委員がおっしゃったことは、まさにそのとおりです。来年度の事業の中で、こういったコーディネート機能を持つコーディネーターを５名程雇用しようとしていますが、そういう組織の中でどういうふうに機能していくかを並行して実証していきます。それをまたフィードバックして、次の年の政策や事業に反映させていこうという両方の側面があります。単にコーディネート機能と言うだけではなく、それがどう発揮しているのかを実証することを、並行して予算の中でやっていきたいと考えているところですので、しっかり御指摘を踏まえて、来年度地域協働局にはなりますが、企画調整局も並行して一緒にやっていきますので、その辺り注力していきたいと思います。

○委員長発言

ちょうどその話が出てきたので、委員の皆さんに問いかけをしたいのですが、この提案３の三つ目のパラグラフ、令和５年度より新設されるということですが、そのパラグラフの一番後ろで「伴走支援（中間支援）」ということで、委員の皆さんの御意見をいろいろと聞いているうちに、最初は中間支援と言っていたところから伴走支援もといろいろ変わったのですが、どんな文言にしたらいいでしょうか。

○委員発言

伴走支援イコール、中間支援ではないですね。

○委員長発言

私も少しおかしいなと思って、先ほど事務局に聞きますと、違う御意見があったので併記しているとのことでしたが、イコールではないだろうと思いましたので、そこら辺どういうふうにしましょうか。ここの文脈だと伴走支援だけでいいかなと思ったのですが。

○委員発言

恐らく去年も伴走支援という言い方をしたと思います。

○委員長発言

じゃあもう「（中間支援）」は取っていいですか、ここでは。

○委員発言

中間支援と言うと、別の団体に全部委託してというイメージがありますね。

○委員発言

ふれまち協が管理と活動の両方を行わない場合というのが選択肢に入っていることに、何か違和感を持つと申し上げました。ただ、改めてこの検討委員会の出発点として、センターを運営するふれまち協の皆さんが抱える様々な困難や御苦労を克服するニーズにお応えすることも、当委員会の課題であるというところから出発しているということなので、理論上の４区分の中で、将来的な可能性として残しておくのはいいのかなと納得をしました。うまく言えませんが、選択肢を示すということでありながら、どれにしますか、ＡかＢかＣかＤか、みたいな流れになっていることが何となくしっくりこなかったんですが、一応納得はいたしました。

その点以外には、委員会で交わされている論議が幅広く入っているかなという感覚で受け止めております。

○委員発言

今までの議論がすごく丁寧にまとめられていると思ったのですが、まとめていただいたときに、この先の議論として、例えば４ページ目の３の２段落目、変化する社会情勢と地域課題に対応し、将来的により発展した役割を持つ施設として活用されると考えられる、とありますが、新しい状況に対応するときに、いろいろなお話の中で、もう十分できているじゃないかというところも結構あります。例えば、そのときに何をすべきか。ちょっと外から引いたこの委員会の見方としては、もっと何かいろいろできることがあるのではないか、こういう新しいシステムややり方を提案できないかということが前提とすると、今は十分できているというようなふれまち協に対して、どういう働きかけをしながら、もっと潜在的にこんなことができるのではないかとか、こんなことが必要とされているということを、どこかで皆さんと考えていかなければいけないところが出てくるのかなと感じました。

だから施設が利用しやすくなれば、あるいは運営の負担が減っていけば対応できるという、単純な図式になってしまっているところに対して、現状に対する皆さんの関わり方を、委員がおっしゃったような自治意識みたいなところの涵養といったところに、次にこういうシステムを改善、刷新していく中で、またそこを考えていくステップを考えていかなければいけないのかなと思います。

例えば、開館時間等を広げてみんなが使える、じゃあ一体誰が何のために使うのか。例えばそこを趣味のサークルだけで使っていく、英会話で使う、それって地域福祉なのかとなったときに、そこを利用できるようになって、利用者としてはすごく便利になるけれども、多分ふれまち協のほうとしては、それは地域福祉なのかというようなもやもやしたものが生まれるのかなという気がして、どういうふうにシステムが変わった後に働きかけていくかということも重要かと思いました。

○委員長発言

御懸念の点については、将来像として４ページの一番下の３行に地域活動の促進とありますから、その第一歩としてそういう趣味の教室等があるのは大いに結構で、

そういう交流や居場所、それから様々な問題の発見、あるいはニーズの共有ということから、地域社会の課題解決に寄与するというところまでいくと。今まで十分にできているところもあったとしても、地域の課題はどんどん出てきますから、そういう意味では、またこういう高みを目指してはどうですかという含みの提案をここでしていますので、多分そういう意味では、様々なレベル、様態のセンターやふれまち協ですが、それぞれの受け止め方によって、やはり次の高みを目指していただけるのではないか、あるいは今持っていらっしゃる問題点への処方箋を示すことができたのではないかと思っています。

○委員発言

まず全体として、本当に丁寧なヒアリングから始まって、中間報告もあり、関係者との意見交換等、本当に丁寧に事務局の皆様にはお進めいただきましたこと、本当に難しいテーマを議論しておりますので、本当によかったなと、まずは感想として感謝申し上げたいと思います。

これが誰から誰への提言なのか、改めて引いて見てみますと、基本的にはこの委員会の委員５名から、市あるいは市長への提言という形になってはいますが、今議論があったように、本来は市だけではなくて、ふれまち協の皆様、そしてそこを利用していないような皆様にとっても、この提言は届けていかなければいけない。そのことも一方では感じながら、そこに届く言葉かなというような考えの中で、先ほどの中間支援を取るとかいう議論があるのかなと思っています。

そういうことを大前提として、今回の立脚点として最大のポイントは何かと改めて今見ていたのですが、委員長に書いていただいた「はじめに」の中段のところ、要はこのシステムが型を変えずに維持されたことが制度疲労の原因だという一言があります。これが、恐らく今後もまた起きるんですね。もっと言えば、このセンターだけではなくて、自治会や町内会やＰＴＡや消防団や、こんなところにも実はこの話は当てはまり得るわけで、実はセンターの話だけに矮小化していいのかなということも、今

思いました。なので、これはまた「終わりに」として少し盛り込んだほうが、つまり今回議論してきたことというのは、本当に一つの象徴的な事例として議論しただけであって、実はこの問題は神戸市を支える、まさしく自治の源泉たる自治会はこのままでいいのか、ＰＴＡや婦人会、消防団はどうかという議論にもこれは敷衍されていく議論であって、この辺りの議論を常に絶やさずやっていく必要があるというメッセージを最後の方で謳うべきなのではないか。その辺り、今おっしゃったようなワーキンググループの議論が生きてくるのではないかということも思いました。

あと、メリット部分だけを強調するという報告書も多い中で、こういった提言をしながらも、そのデメリットもポイントに盛り込んでいます。こういうことをやろうと思ったら、こんなデメリットやハレーションも起きる可能性があるということを隠さずに、やはりこれを市民あるいはふれまち協の皆さんにお見せしながら選択肢を考えていただくという、そのような報告書になっているのも良い点だと思います。

翻って、じゃあ足りない視点は何なのかということを、これを大幅に変えてほしいということではなくて、その辺りを「終わりに」や「はじめに」のほうに少し入れたらいいのかなと思いました。本文そのものということではないのですが。

一つは、昨日、自治体学会の部会で荒川区の元職員の方がこんな発言をされたんです。荒川区は御承知のとおり区における幸福量をはかってみようという動きなど、いろんな先駆的な取組みをされておられますが、要は都市部の自治のあり方と、それから人口10万人未満の都市の自治参加だと、やはり根本的には違うわけです。荒川区で自治の問題を議論するときに気をつけていることは何かという話をされていまして、それは知らない人をなくす、なくすのは無理でも減らす、この１点だとおっしゃいました。つまり都市部は基本的に匿名性が高いですから、神戸も、もちろん東京ほど人口はおりませんが、それでも新しい住民の方やマンションにお住まいの方がおられると、どうしても匿名性が高くなってしまう。そういった中、ここで私が気になるのは、「市民の皆さんが」とか、「地域住民が」とかありますが、その中で自分が地域住民

である、自分が市民であるという自覚や意識みたいなものをどこまでお持ちいただいているのかなということは、私が日頃接しているまちとは違う状況だろうと思っています。それゆえに、このようなセンターの存続はとても大事で、一部の方だけが利用するという形の中であっては、まさしく自治会の延長線上みたいな組織になってしまいますので、そこではないだろうと。この施設はある意味、２ページに整理されているとおり、ボランティアの最初の一歩、多世代交流、居場所、くつろげる、楽しめる、学べる、働ける、これはつまり自治会・町内会や消防団、婦人会ももちろん近いことをやっていますが、基本的にはそうではなくて、テーマ型と言ったらちょっと言葉がまたくくり過ぎるのですが、要は自治の義務感や使命感だけではなくて、むしろプラスアルファの楽しめる場や、もう一歩踏み込んでという方々がやはり集まる場なのだろうと思います。その辺りを少し差別化した議論をしていかないと、自治会の延長線上みたいなことだけ捉まえていると、それは違う議論になるのではないかということを思いました。これをどのように盛り込むかは難しいのですが。

その最大の鍵は何かというと、去年「公民館のしあさって」という本が出ました。とても面白い本で、一番響きましたのが、これＯＥＣＤ（経済協力開発機構）が最近言及されていたのですが、ＰＤＣＡサイクルをやめようという話です。何かというと、ＰＤＣＡというのは、基本的にはマイナスの状態をプラスマイナスゼロにするには物すごく効果的ではあるのですが、それ以上の効果ってなかなか出ないんです。じゃあ何が要るかというと、そこではＡＡＲということをおっしゃっていました。何かというとAnticipation（見通し）、Action（行動）、Reflection（振り返り）です。つまり、まずは楽しさが先ですよと、楽しくないと、面白くないと続かないわけですから、そこを忘れてしまうと使命感、義務感になってしまって、結局、後ろを振り向けば誰も担い手がいない、次の後継者がいないと、先ほど委員がおっしゃったことと全く同じ問題がここでも起きてしまうわけですし、今起きているのだろうと思います。それを少しこのまま延長して、延命治療みたいなことをやる議論ではないと思ってい

ますので、本来のミッションに帰ると、このセンターというものは地域福祉の向上のためにあるわけですので、幸せの向上のためにあって、そのために全小学校区をカバーしていると、この辺りのミッションが改めて２ページに示されていますので、もう少し楽しさみたいなことがしっかりと感受できる、享受できる、涵養できるような施設にしていきたいんだというメッセージが、もう少し伝わるといいかなと思います。それは名称をどうするかとか、共通運営基準をどうするかとかといった、細かいことはもちろんありますが、それ以上に大事なことというのは多分その部分なのではないかと思って、そこを書かないと、何かまた義務感をちょっとましにするだけの緩和措置、緩和ケアみたいな話になってしまいますので、その辺りが少し弱いなと。だからその点を、「終わりに」のほうで、もう少しこの施設を、楽しみがあふれるような、人が集まるような場にしたいなというメッセージを、何か謳えたらいいのではないのかと思いました。

もう一点だけ、その中で少し気になっているのが、先ほどの「市民」の定義の話です。今、ふるさと納税も含めて、非常にこの市民の定義は非常に難しくなってきていると思います。これまでは職住一致で、住んでいる人イコール市民であって、その方々が地域で働くというモデルが20世紀はずっと続きましたが、今は住んでいるけど働いてないとか、働いていないけど住んでいるとか、いろんなパターンがある中で、さらにオンラインの発展によって、ふるさと納税で神戸に関わるいろんな方がおられますよね。人口が800人の新潟県の山古志村は、デジタル村民が950人を超えていて、その中で選挙をやり、その方々が予算の使い方も決めるということを、今やり始めています。市町村合併の中で届きにくくなった自治意識というものを、デジタル村民とリアル村民が対話をしようと始まっているわけです。そういった方が神戸にも多分おられると思います。神戸の出身者で、住民票は置いてないけれども神戸が好きだとか、修学旅行で来ただとか、たまたま一定の期間ここで働いたとか、そういった方々が関われるような伸びしろがこの文章の中で感じるかというと、私が感じたのは、地域住

民や市民への提言の中で、ここに住民票を置いておられて住んでいらっしゃる方がメインで、もちろん９割５分の方はそれでいいと思うんです。だけど、その残り少ない１割弱ぐらい、関係人口という言葉がありますが、関係人口でも活動人口でも何でもいいのですが、そういった神戸のゆかりのあるファンみたいな方はセンターで活躍できないのかなという、逆に排除の論理を感じてしまったんです。そうじゃないだろうと思いますので、メインではないけれど、そういった方々も、例えば先ほど非営利の話がありましたが、そんなところで関われる伸びしろが、ここに担保されるのかなということも感じましたし、運営の選択肢を広げることによって、新しい運営の担い手が入ってくると、その担い手と一緒にやってくるような団体もあるかもしれませんから、そういった方々も活躍できるような地域があってもいいだろうと思います。その辺りがちょっとどこにも読めないのが気になりましたので、その辺りを本文で織り込む必要はないのですが、例えば「終わりに」のところで、この提案に入れられなかったけれども、こんな視点も盛り込まなきゃいけないということを入れていただくといいのではないかと思いました。ワーキンググループのときの議論も、入れるべきものがもしあれば、「はじめに」や、２ページの福祉センターの機能等、その辺りのところで、少しプラスアルファの議論を入れてもいいのではないかということです。私としては「終わりに」のところで、今回あまりメインで議論できなかったけれども、今後必要になってくるだろう他の施設や団体、あるいは関係人口、あとは楽しみ方、そういった部分のキーワードを入れていただけると締まるのではないかなということを思ったということであります。

○委員長発言

あくまでもこの検討は、とりわけやはり40年にわたって、これは人間で言ったら、もう全然健診も受けずに、生活習慣病をある種ほったらかしで40年間ですから、血液はドロドロ、血圧は高い、不整脈はある、胃に穴が空いている、肺は真っ黒で、救急で運ばれているんですよね。我々としては救急で運ばれて、まずは延命措置をする。

それから、まずは安定的な状態まで、今ＩＣＵを出ようかどうか、もうそろそろ一般病棟に行けるとこら辺まで回復させようとやってきました。先程委員がおっしゃったことは確かにそうなのですが、こんなふうに元気になって、早く退院しようという思いはあったほうがいいと思うけれども、そういう意味ではまだまだＩＣＵを出て一般病棟ぐらいのところだから、まだ次の手術や継続的治療があったり、そういう処方箋をやはりちゃんと示して、選択肢はインフォームド・コンセントみたいなもので、どうしますかということを、市にもふれまち協にもお尋ねして、こんな選択肢があります、治療法はこうですよ、どれを取られますか、リハビリに向かわれますか、それとも、もうこれでいいとお考えなのか。そういう意味ではちゃんとインフォームした上で、どんな意思決定を地域がされるかということで、そこら辺今さっき申しましたように禁欲的になりました。

一方では、これに対してはやはり物足りないと思って、何でこんないろんな問題が出てきたのかと考えたときに、この委員会では議論しなかったので、あくまでも個人的な所感といいますか、メモという形で、個人の意見として載せることを皆さんにお諮りしたい。社会学的な見方をすると、これは先ほど委員もおっしゃったように、センターだけの話とは違うんですよね。消防団でもＰＴＡもそうだけれども、結の文化といいますか、ある意味、地域共同体が共生しているものです。それは公共、あるいはそういう市民の自治というのとは少し違うかなと。やはり共同体の中で、これは義務であり権利であるというものを背負ってきて、しかしそういう価値体系や文化を知らない、あるいは乗りたくないという人たちもいる。そういう何かある種の葛藤、もっと言えばそういう結の文化や共同体、もっとテーマに絞り込んだテーマコミュニティの文化、それからマーケットのようなものを中心に、貸し借り等は全部お金でできるのではないかと考える文化。あるいはもっと税金で全部公営化しろといった考え等、違う文化もたくさんあると思うのですが、ちょっと焦点をこの二つに絞ると、そういう思いの違う人たちが、お互いの立場を違うのではないか、おかしいのではない

か、何で私たちだけ、何で私たちを排除するのか、みたいなことになっているのは、実はそういう結の文化が根底にあって、その結の文化が日本の社会ではあちこちでまだまだ浸透しています。

ところが、神戸市はこれを結の文化と言わずに、ボランティアでやってくださいという近代の自治論みたいなものと、すり替えるとまでは書いていませんが、そういうロジックというかレトリックが、この40年間であったような気がして、やはりその齟齬というか、ほころびというか、あるいは現実的にそういう結の文化なんて関心もないし乗りたくないという人たち、もっと目の前の問題に関してだけという人たち、あるいは地域社会、小学校区なんてあまり関係なしでという人たちもたくさんいらっしゃるので、そういう文化の違いがあるのではないか、そういう齟齬、文化的な葛藤の齟齬があるのではないかと見ましたので、そういう意味での問題の本質的な部分に関わることを言ったほうがいいかなと思い、書かせてもらったのが、最後の所感です。

さらに、委員がおっしゃっているように、そういう生活そのものが実は楽しいはずだということをもっと言えばいいのでしょうが、あれもこれもと書かないほうがいいと思い、少なくともこういうずれがあるから、実は生じているのであって、皆さんこれが常に組織間の対立や人間関係のもつれに読み替えてしまうことが多いので、実はそうではないですよということを、こういう学識経験者の枠での委員会ですから、申し上げたほうがいいかなと思いました。

そういう意味では「終わりに」の部分にはなっていなくて、「終わりに」にするには全員で議論しなかったし、いわんや自治の問題でもあります。地域社会像でもあるし。それはこの委員会ではやらなかったのですが、この委員会をはじめ、いろんな蓄積が今まで他の委員会でもありますので、その文化遺産をもっと活用して、これはある種の処方箋ですが、それ以上のビジョンをつくっていくところに、そういう今までの蓄積や今の思いを生かしていただく機会があればいいかなと思いますが、ここは少し禁欲的にさせていただきました。

○委員発言

多分この10年間の地域自治の仕組みづくりは、地域自治を別に合理的なものではなくて、顔の見える関係でお互い許し合う、その中で公共心を育てていくみたいな話でしたので、地域自治という言葉でも矛盾するものではないということが一つです。

それから、これは先ほど委員がおっしゃったこととともつながるのですが、提案２の残すパターンのうち（１）の「両方行うとき」は２パターンに分けたほうがいいと申し上げました。どういう２パターンかというと、一つはまさに発展型で、幾つか既に萌芽はあるのですが、地域運営組織のような形で、本当に自治を使ってどんどんやっていこうというパターン。でも、これは少数派だと思います。もう一つは、今のやり方であと５年、10年はもたせますというところが多いと思います。だから、その５年、10年の間に、ほったらかしにしないで、もう少しゆっくりやっていくという方法。つまり、（１）の場合でも全てが発展型にいくのではなくて、今の活動補助金の制度を変えないのであれば、何となくボランティアを使いながらやっていくというところが多かろうと思います。だからその二つに分けたほうがいいのではないかということを申し上げました。

去年のアンケートでも、今もう十分にできているという自己認識を持っている方は非常に多かったです。去年のワーキンググループでも書いたのは、やはり地域カルテの作成と、それに基づいた地域活動のあり方検討を住民主体で丁寧に行ってくださいということ。つまり、今やってらっしゃる方が本当にそこの地域にどんな宝物があるかとか、子どもはいなくても即戦力になる転勤族の若い人がいるかとか、そういうデータを全く見ないで、何となくずっと同じようなメニューでやっていらっしゃる。だからデータを見ることで、ある意味宝物も見えるし、あるいは今までのやり方だったらまずいということが見えるし、この人口状況だったら今までのやり方を踏襲しようという選択肢もあってもいいと思います。

なので、もし付け加えるとしたら、地域カルテの普及。それから、それに基づいた、

この地域活動のあり方をみんなで検討する場みたいなものが必要だという話が文章としてあると、何となく感じている違和感みたいなものは、ある程度緩和されるかもしれないと思いましたが、いかがでしょう。今、一生懸命やっていらっしゃる方に、これ以上全て自治というのを目指すのは無理だということは私たちも分かっていますが、ただ、全然地域の実情を知らないで、今までどおりにやっていく、それでできていると思われるのも違うかなと思うので、やはりデータの公開と、いろんな方を交える場の設定までは必要ではないでしょうか。

○委員長発言

情報共有ですね、ふれまち協がそういう相談ができるとか、それで伴走という言葉も使いました。

○委員発言

そうです。その中に伴走支援が出てくると思います。

○委員長発言

それから新しい体制も含めて、この報告書に書くかどうかは別として、実際には先ほどおっしゃったように、いろんなデータの活用や、今までの他の委員会でも蓄積がありますので、もう一度振り返ってそれを活用していただくのが一番適切かと思います。

○委員発言

「選択肢」や、「選択する」という言葉がいろいろ出てきますが、選択をしたら１回限りのような、あるいは選択肢があって、岐路に立っていてどっちを選ぶみたいな、何か突きつけられた感じにならないかなというのが、ちょっと読んでいて気になりました。そうではなくて、当座の選択でしょうし、選択によっていろいろ変化することによって、また違う選択肢が見えてくるというような、そんなところも何か少しにおわせられたらいいのかなという気はしました。

○委員発言

この提案自体が、地域コミュニティの活動とテーマ型の活動が交わる場として、このセンターを活かしていきましょうということです。自治意識の涵養という話も出てきて、本当に目指すところはすばらしいと思いますが、やはりそれは自治意識の涵養、運営のあり方であったり、そういうところにもう少し開かれた運営を目指していくということですよね。

私もいろんな場づくりをやって、そこに様々な方に関与していただいて、それを地域の場となるようにという取組みをいろいろとやっていますが、そこのつどい場会議みたいなところに多くの方に参画をしてもらって、そういうところから少しずつ、その場が地域の場に開かれていくというやり方しか結局見つけられないというのが、何年かやってきた中で今の時点での結論です。なので、その小学校区の地縁の人を中心としながら、今まで運営されてきたセンターにもう少しテーマ型で、遠くの方や関係人口といった方が入っていって、融合させながらセンターの発展にということですが、じゃあ一体どうしていけばというのが、少しだけイメージがまだつきにくいです。もちろんこの検討委員会で決着が出る問題でもないのですが、より明らかになっていって、ふれまち協の皆さんにもそういう明るいビジョンが示せるといいなと思いました。

○委員長発言

こういう検討の常で、山頂に来たと思ったら、まだ次があったということです。新たにたくさんの御注文や課題が出てきたことは重々承知ですが、年度内でこの検討委員会は報告書を出すという方向でしたので、一応この原案を承認していただくということでよろしいでしょうか。

○委員発言

先ほどの委員の御指摘も含めて１点だけ。原案そのものを、もう大幅に変える必要はないと思っていますので、これでいいと思います。委員長の所感もとても重要だと思いますので、ぜひ載せてほしいです。

その上で、「終わりに」のところで、先ほど委員もおっしゃったように、結局こ

の検討や提言、あるいはこの選択が、最後の選択肢、最後通牒ではないという話や、まだまだ研究し続けなければいけないという話、これが終わりではないというメッセージだけは、最後に二、三行でいいので入れてほしいなと思います。

この提言だけをもって全てが解決するわけではなくて、先ほどまさに例え話でおっしゃった、ＩＣＵを出るところまでしか多分描けていないという中で、じゃあ今後どのようなリハビリテーションを選択するのか、それに対しても不断の研究や検討が必要だと、それについてはもう次の場所に委ねたいみたいな、そんなことを二、三行入れてもらうだけで、ここが最後ではないということが分かると思いますので、そこだけ少し入れてもらったほうがいいのではないかと思いました。

○委員長発言

本当に神戸市の実情をよく御存じで、かつ今までそれに深く関わっていらした識者の皆さんの御意見ですので、まだまだ御意見があるというのはよく承知しています。それをもっと吸収して消化して、入れていったらいいと思ったのですが、なかなかそこまでいきませんでした。また、せっかくそうやって築き上げてこられた報告書やデータ等の活用がまだまだ足らないという御指摘もされましたので、新たにスタートする地域協働局の体制の中で、ぜひそういうものを活かしていただくように、引継ぎのほうもよろしくお願いいたします。

それでは、先ほどの御提案も受けまして、数行の書き加えを含めて、そこは委員長に一任ということでよろしいでしょうか。

（異議なし）

○局長挨拶

大変お忙しい中、先生方には１年間にわたって非常に活発な御議論をいただきまして、本当にありがとうございました。

地域協働局の趣旨だけ少し御説明したいと思います。まさにいろいろ今お話があった中で、地域に何を求めていくのか、何をお願いしていくのかということを前提に考

えたときに、今回地域協働局には、参画推進の部分と移住の要素、多文化共生の要素、そして区役所課という組織の部分、これらを一緒にするということになっています。ですので、今日こうした形で御報告や御意見をいただいたことをまとめた上で、それを前提に、来年度この地域協働局の中で、報告書だけではなくて今日いただいた御意見も含めて、いろんな要素を踏まえて対応していきたいと思います。

もちろん事業としては地域協働局に移りますが、企画調整局としても総合政策的な部門として、先ほどデータのお話も委員からございました。ＥＢＰＭという要素でいうと、やはりそういったカルテも含めて見える化といいますか、地域の方に、今状況はこうなっているんだというところを含めて入っていって、そこから今どういう課題があるのかをコーディネーターが活用しながら、区役所の地域協働課と一緒に入っていくという仕組みづくりを、来年度しっかりつくって検証していきたいと思います。今後、いろんな形で御意見やお気づきの点があれば、どんどんご助言いただければと思います。これに限らず、今後地域の問題のほうに大きく移っていくことになると思いますので、今、大きな転換期にあるということも含めて、今回、地域協働局という形で一つの局を設置しました。

この最終報告を踏まえて、我々が今考えておりますのは、地域協働局のほうで最終の基本方針（案）を策定して、その上で実際の事業や条例、制度の仕組みづくり等に入っていきたいと考えています。並行して、先ほどご説明した事業化等も、しっかり実証もしながら併せてやっていきたいです。それを最終的な形に結びつけていきたいと考えておりますので、また今後とも御指導いただけたらと思います。本当にどうもありがとうございました。